

Title	マルサスのリカルドオ批評一斑
Sub Title	
Author	小泉, 信三
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1921
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.15, No.11 (1921. 11) ,p.1491(79)- 1498(86)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19211101-0079

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

慶應義塾大學 神戶寅次郎先生著
教授法學博士

契約解除論

菊判總布上製本函入

定價金參圓

内地送料金拾貳錢

新刊發賣

本書の内容は曾て三田學會雜誌の上に連載せられて學界の視聽を聳てしめたるもの、今新に訂補を加へて一冊と成す。債權法中最も疑義に富める解除解除の性質及び効果を詳論して餘す所なく、之に關聯して所謂物權的意思表示及び辨濟行爲等の性質效果の研究に及び、凡百の疑義を一掃するの概あり。寔に近時稀覯の雄篇、民法研究家必讀の良書を謂ふべし。

雜 錄

マルサスのリカルドオ

批評一斑

小泉 信三

Ricardo の生前死後を通じて、Malthus はその最有力なる反對論者の一人たるべし。この歴史性向を異にして而かも親交ありたる二人は、通貨、貿易、利潤、價值尺度等の重要問題に就て其所見を異にしたる事既に廣く人の知るところの如し。左に掲ぐるものは、Malthus が一八二七年の小著 Definitions in Political Economy, preceded by An Inquiry into the Rules which ought to guide Political Economists in the Definition and Use of their Terms; with Remarks on the Deviation from these Rules in their Writings 中の第五章「Ricardo 氏が用語の定義及び適用に就て」の翻譯なり。

リカルドオ氏が樹立せんと試みたる價值の標準が不完全のものたる事は之を認めざるを得ず

第十五卷

(一四九一)

雜 錄

マルサスのリカルドオ批評一斑

第十一號

七九

と雖も、而かも予は氏が富と價值との間に明確なる區分線を劃することに依りて經濟學に重要な利益を寄與したりと思はざる事能はざるものなり。二者間に差異あることは恐らく大多數の學者の感知し居たるところなるべしと雖も、氏以前に於ては、何人も未だ斯の如く的確に之を指示し、又斯の如く大なる意義を之に附與せるものなし。氏は「各人の貧富はその人生の必要物便利物及び娛樂物を享受し得るの度に應じて岐る」(註一)との富の定義に於ては、全然アダム・スミスに同す。而して之に附加するに予の當を得たりと認むる「されば價值は本質上富と異なる。價值は潤乏に由らず、生産の難易に由て定まるものなるを以てなり」(註二)との意見を以てしたり。彼れは後段に至りて謂へらく、「アダム・スミスは、當を得たる富の記述を與へ、予は一再ならず之を指摘したりと雖も、後に至り彼は

東京 神樂 田町 巖松堂書店 振六 替五 東五 京六

之に異なる説明を下して、人の貧富の岐るゝところはその購買し得る労働量に由らざる可からずと謂へり。然れども此記述は前の記述と本質上異なり、明かに當を失す。所以何と云ふに、鑛山の産出力増加し、生産の便易増進の爲め、金銀の價值下落せるか、或は天鵞絨が舊に比して少なき労働を以て製作せられ、爲めに其價值舊の半ばに下落したりと想像せよ。凡て是等貨物を購入せるもの、富は増加すべし、一人は其金銀器皿の數量を増すべく、又一人は二倍量の天鵞絨を買ふならん。然れども、此の器皿並に天鵞絨の増量の所有を以てして、彼は從來以上の労働を雇傭すること能はず。何となれば、天鵞絨及び器皿の交換價值は低下せらるべきが故に、彼等は一日の労働を買はんが爲め、之に比例して此種の富の更に多くを投せざる可からざるを以てなり。されば富はその購買すべき労働量に依

て評定せらるゝ事能はざるものなり。」と(註三)
 註一、Wealth of Nations, b. i. c. v. p. 43. 6th edit.
 註二、Polit. Econ. c. xv. p. 320. 3rd edit.
 註三、Polit. Econ. c. xx. p. 326. 3rd edit. — 因みにリカルド氏が此處には労働を彼自身の學說に依らずして、予が常用る可からずと爲す意味に於て價值の尺度として用ふることを注意すべし。彼れは金銀器皿及び天鵞絨に之に費やされたる労働量に依らず、その支配し又は雇傭すべき量に依て測定せるなり。
 是等の評言に於ては予は全然リカルドオ氏に同するものなり。若し富は人生の必要物便利物及び贅澤物を以て成り、同量の労働は異なる時、異なる事情の下に於て、人生必要物便利物及び贅澤物の甚だ異なる數量を生産すとせば、労働を支配する力と人生の必要物便利物及び贅澤物を支配する力とは、本質上別なること極めて明白なり。まことに一は價值の記述にして一は富の記述なるなり
 然れどもリカルドオ氏はアダム・スミスが

彼自身の記述に従ふも猶は富と價值とを混同する事の過に陥れる事を示す事に充分成功せりと雖も、猶且つ氏は遂に何處に於ても、其著の最も顯著なる特徴をなせる彼の特有の價值觀の合宜を證明することに成功せざりき。

氏は、單に其の所謂一貨物の價值はこれに費やされたる労働量に依て決せらるゝ事を主張するに止めず、大體貨物はこれに費やされたる肉體労働量——その生産上一層直接に投せられたる労働と共に、消耗せられたる原料及び道具に費やされたる労働をも含む——に應じて相互交換せらるゝとの命題を説述す。(註二)

註一、Polit. Econ. c. i. sec. III. pp. 16, 18, 3rd edit.
 然るに此提議は一般普通の經驗と相容れず。

極めて倉率の觀察も猶は、事物の自然普通の行程よりの一時的離脱に對し必要なる斟酌を加へたる後、結局此交換法則に従ふ貨物の種類が極

めて局限せられ、之に従はざる種類の貨物大多數を包含することを會得せしむるに足れり。勿にリカルドオ氏自身も彼れの法則に對して例外あることを認めたりと雖も、彼れの例外に屬する種類、即ち投用固定資本の量を異にし持續力を異にする場合、及び投下流通資本の回轉期間の同一ならざる場合を檢するときは、その甚だ多數にして、本則は例外、例外は却て之を本則と見るべき程なる事を發見すべし。

而かも是等の容認にも拘らず、氏が其本則を以て進むこと、宛かも之に對する例外の僅有若しくは悉無なりしもの、如し。就中氏は賃銀の價值を測定するに之に費やされたる人間労働の量を以てす。而して吾人にして此の價值要素のみを目中に置くときは、賃銀の價值は耕作及び改良の進行に連れ騰貴するの傾向ある事疑ふ可からざるを以て、氏は富國に於て起る事を常とす

る利潤の下降を賃銀價値の騰貴に歸し、實際にその經濟學に於ける最高業績と認められ來れる全利潤學說をば賃銀價値の騰落の上に建てたり。氏は曰く、「予の努力は本書全巻を通じ、利潤率は賃銀の下落によるの外決して之を騰貴せしむる事能はざる事を示すにありき」と。(註一)また以爲らく「利潤は——之は幾度反覆するも頻繁に失せず——賃銀によりて定まる、但し名義賃銀によらず實質賃銀に由り、年々労働者に支拂はるゝ磅數に由らずして、此の磅を得るに要する労働日數に由る」と。(註二)

註一、Polit. Econ. c. vii. p. 137, 3rd edit.

註二、Id. p. 152.

さればリカルドオ氏の定義に従へば、實質的賃銀は食物衣服なり又は貨幣なり、労働者がその労働に對する報酬として受くることゝの貨物に費やされたる労働量に依りて決定せらる。

みらるゝと雖も、其穀物賃銀は低減せらるべく、嘗に彼れの穀物支配權のみならず、其一般的狀態も亦た不良となるべし。而して實質的賃銀の繼續増加と共に「地主の狀態は常に改善せらるゝに労働者の狀態は一般に下傾すべし」と。(註二)

註一、Polit. Econ. c. v. p. 98, 3rd edit.

第二に、予が知れる限り、リカルドオ氏以前に如何なる著作者も、曾て賃銀若しくは實質的賃銀なる語を比例を意味するものとして用ゐたる事なし。詢に利潤は比例を意味し、而して利潤率は常に正しく支出價値に對する百分比に依て評定せられ來れり、然れども賃銀は一樣に、一定量労働に依て得たる全生産物に對する比例にはよらずして、労働者が受くる特定生産物の量の大小、若しくは斯る生産物が附與する人生必要物及び便宜物支配權の大小によりて騰落するものと認められ居たりしなり。特にアダム・スミス

然るにリカルドオ氏の利潤學說の基礎とせられたる實質賃銀なる語に對し茲に附與せられたる意義は、全く慣用に反するものにして、明かに學問上に於ける用語適用に對する最も明白なる規則の凡てに抵觸するものなり。

第一に、リカルドオ氏の時以前に日常會話に於て、實質的賃銀の増加は一般に労働階級並に其家族の間に於る生活並に快適資料の減少を意味するが如き意味に此語の用ゐられたるを聞けるものなしと信ず。然かもリカルドオ氏が此語を用ゐる意義に従へば、是は斯くあるべきなり。社會の進歩に連れ、地主及び労働者の境遇を異にすることを云ひ、地主の富の増加を叙べたる後彼は謂へらく、「労働者の運命は爾かく幸福ならず。労働者は詢に前よりも多くの貨幣賃銀を受くべし」(而してリカルドオ氏の貨幣は此場合彼れの所謂實質的賃銀を測定するものとして用

は屢々實質賃銀なる語を用ゐ、而して常に最も自然なる意義に於て、生活必要物及び便宜物を意味するものとして之を用ゐたり、是等のものは普通の用語及び感情に従へば、労働者に支拂はるゝ貨幣又は他の如何なる特定貨物よりも當然更に實質的のもの認められ得るなり。而してアダム・スミス及び大多數の他の經濟學者が此語を此意義に用ゐる事は、之に加へられたる新解釋を必然一層奇異、一層無理由のものたらしめたり。

第三に、此語が前に用ゐられたる意義に對しては何等の反對なかりき。そは自然にして且つ有用なりき。説明の爲め之に新解釋を加ふることも亦た必要ならざりしなり。労働賃銀の利潤に對する全影響は、利潤は全生産物中の労働賃銀支拂に充てらるゝ部分の比例に依て決せらるゝと云へば、明瞭に記述せらるべし。敢て量の大小

小を問はず、此比例を労働の實質賃銀と呼び、又賃銀の價值騰貴する毎に利潤は之に比例して下降せざる可からずと主張するの要なきなり。利潤が全生産物中労働賃銀に充てらるゝ部分の比例に依て決せらるゝとは、之を適當に説明すれば眞理なる事、又一般的經驗に依て確證せらるゝ事發見せらるべき命題なり。然るに賃銀の價值騰貴すれば比例的に利潤は下降すとの命題は、

實質賃銀なる語の新解釋は一層有用なりとの特長を有せざる確實なり。

労働の同一量が費されある貨物は常に同價值を有すとの假定の下以外に於ては、眞なることを得ず、而して此假定は恐らく五百件中の一件に於ても眞なること發見せられざる可きものたるなり。是は偶發又は一時的の原因に由て然るにあらずして、文明及び改良の進歩に連れ、絶えず使用固定資本の量を増加し、流通資本の回轉期を一層多様不同ならしむるの傾向ある、事物の自然的必然的狀態よりして然るものなり。故に

第四に、實質賃銀なる語が用ゐらるゝ新意義は一貫して持續せられず、又之を舊事實舊見解に適用するに、起れる變化に對する適當の斟酌を以てせられず。而かも是は、既に一義に於て耳目に慣れたる舊用語を、別の異なる意義に用ふる場合には殆ど避く可からざる事なるなり。それはリカルドオ氏が、實質賃銀の尺度たらしめんと意圖せるその人工的貨幣の使用に於て殊に注目を要す。即ち彼は謂へらく、「アダム・スミス及び之に従ふ凡ての著作者が、予の知る限り一人の例外なく、労働價格の騰貴は一樣に一切貨物の價格騰貴を生ずと主張せるを指摘する事恐らく適當なるべし。予は予が能く斯る意見には何等の理由なく、賃銀騰貴せるときはたゞ價格測定の要具よりも少なき固定資本の之に投せらる

貨物のみ騰貴すべく、それより多くを有する凡ての貨物は積極的に下落すべき事を證明し得たらん事を希ふものなり。之に反し賃銀下落すれば、價格測定の要具よりも少なる比例の固定資本の之に使用せらるゝ貨物のみ下落すべく、それより多くを有するものゝ價格は凡て積極的に騰貴すべし」と。(註一)

を以て測定せば、彼等の謂へることは正しきなり。少くも貨物の價值をその支配すべき労働量に依て測定するアダム・スミスに従へば、労働の貨幣賃銀一般に騰貴すれば、貨幣の價值は比例的に下落す。而して貨幣價值下落するときは、貨物價格は常に騰貴することはリカルドオ氏自身も之を曰へり。

註一、Polit. Econ. c. 1. sec. vi. p. 45, 3rd edit.

故に此場合リカルドオ氏とアダム・スミスとの

然るに是等労働賃銀騰落の凡ての結果は全然賃銀がリカルドオの空想的貨幣を以て測定せらるゝことに由るものなり。此方法を以て、且つ此方法を以てのみ測定すれば、リカルドオ氏が所説は當を得たりと雖も、リカルドオ氏の時に至る迄、アダム・スミスもアダム・スミスを奉ずる何人も、曾て此方法に於て賃銀の價格を測定することに思及びたることなし。而して之を彼等の慣熟せる方法を以て、即ち目前存する貨幣

の差違は、リカルドオ氏が自ら労働價格なる語を其反對論中に用ゐらるゝとは異なる意義に用ゐつゝあることを忘るゝより生ずるものなり。同様にリカルドオ氏の外國貿易の結果に關する甚だ驚く可き斷案、即ち「外國貿易の擴張は決して直接一國內に於ける價值額を増加せしめざるべし」との説は、全く彼が價值なる語をその前人が用ゐる來れるとは異なる意義に用ゐるよしてり生ずるものなり。

輸入外國貨物にして、之を購ふ爲め外送せる諸貨物に費やされたる勞働量に依て測定せらる可くんば、購入物の如何を問はず、其價值の増加することなきは固より眞なり。然れども若し輸入外國貨物の價值が、從來の如き方法、即ち貨幣か勞働か、或は輸入せられたる曉きにその支配すべき貨物量かを以て測定せらるゝときは、當局商人をして巨利を博せしむる冒險成功の直接の結果は、國內價值額の増加にあるべきこと毫末の疑なし。輸出物の價值に比較して輸入物の價值は、此の特殊の貿易に於ては平常よりも大なるべく、此の一方面に於ける價值の増加は必然的には別の方面に於ける價值減少に依て相殺せらるゝ事なかるべし。また實際に大多數貨物の價值が、その貨幣に測らるゝと勞働に於て測らるゝとを問はず、同時に騰貴することは最も普通の事たるなり。

れる言葉であるが、それが段々に個人經濟にも政治算術にも、又は經濟學にも用ひられるやうになつて來たのである。初期に於いては個人は何等かくの如き言葉の必要を見なかつた。原始的農業家は自己並びに家族の食糧を、殆んど總て自己並びに家族が、土地を手づから耕作して得たのである。それだから Abraham と Lot の如く彼の家畜 (stock of cattle) の増加。または土地の状態の改善に注意するのみであつて、彼等は恐らく幾何の貨幣をその事業に放下し、さうしてその金額に對して一〇パーセント或ひは幾パーセントを利得したといふ言ひ方を、夢想だもしなかつたに違ひない。また初期の工業家は彼の道具 (stock of tools) が改善せられ、または駄目になる時、及び彼の材料 (stock of material) 或ひは既成品が増減したる時を知れども、彼がその事業に投じたる貨幣額に對して、如何なる

さればリカルド氏が其用語の定義及び適用、並に經濟學根本原理の或物を論ずるに當りて、用心甚だ足らざりし事は之を認めざる可からず。而して予は別の處に述べたるが如く、讀者の多くが彼れの著を難解となす理由の一が茲にあることを疑はざるものなり。既に甚だ耳目に慣れたる舊語辭の新意義に用ゐらるゝときは、著者に取りては其適用を一貫すること殆ど不可能にして、讀者はまた之に附せられんとする意義を常に心に留むること極めて困難なるなり。

「資本」なる名辭の變遷(下)

園 乾 治

四

以上述べたところで大體明かである如く、この資本といふ言葉は、會社の財に就いて用ひらるる利潤を得つゝあるかといふことを、知る必要は決して起らないのである。

然しなから、會社に關聯してこの資本といふ言葉は段々に使用せられるやうになり、多數の人々就中商人は、その事業に投じたる貨幣額を計算することが出來、さうしてその金額に對して幾パーセントの利益を得るかを計算することが便利であり、その利益の割合によつて同時期に於ける隣人の事業とその成績を比較し、或ひは以前の自己の事業の成績と比較することが出來、尙ほまた或る方面の事業を開始し、他の方面の事業を中止するのが適當であるかを知り度いのである。然るに投下したる貨幣額を表示するものとしては「stock」といふ言葉は、便利なものといふことが出來ない。何故なればこの言葉は時には投下した貨幣額を意味することもあるが、物を意味することが多いからである。或る